東洋の思想と宗教　第三十八號　令和三年（二〇二一）　三月　抜刷

辯才天の悪龍教化と龍口明神
――江島縁起説話の成立をめぐって――

田中亞美

辯才天の悪龍教化と龍口明神
――江島縁起説話の成立をめぐって――

田中亞美

はじめに

江の島は、天川・嚴島・竹生島・金華山等と竝び辯才天の靈場として信仰を集めてきた。その由緒を説く縁起は、大きく眞名本・假名本の二系統に分類されるが、[1]いずれにおいても江の島の成立はおおよそ以下のように語られる。

深澤の湖に五頭の悪龍が棲み、人々を苦しめていた。ある時辯才天が諸天善神を伴って出現し、島を造って降り立つ。悪龍は辯才天を見て懸想するも拒まれ、悪心を止めて殺生を斷つことを誓う。辯才天は龍を受け入れ、龍はその後龍口山、すなわち子死方明神になる。

悪龍を佛・菩薩・神や高僧が退治あるいは教化するという話は、經典や地誌・説話集・縁起に數多く存在する。恐るべき存在である悪龍に勝利する物語は、佛・菩薩・神及び僧侶の力が優れていることを示す役割を持つ。しかしそれらの多くは、法を説いて悪心を止め三寶に歸依させる、あるいは神通力によって悪龍を降伏させるといった物語である。女神が悪龍からの懸想を縁として教化するという江島縁起の話は、他の悪龍調伏譚と比較すると、明らかに異質なものといえる。この話は、どのような背景のもとに、また、いかなる資料に據って成立したのだろうか。

小稿は、中世日本における辯才天信仰の一端として、江島縁起における辯才天の悪龍教化譚が、どのように形成されたかを解明することを目的とする。まず、眞名本『江島縁起』

に據って、その概略を示す。次いで、他の悪龍教化・調伏譚との比較から、江島縁起の獨自性を改めて確認する。さらに、女身による教化という、江島縁起と共通の構造を有する觀音の毘那夜迦王教化譚を取り上げ、江島縁起への影響を考察したい。

一　江島縁起の概略

ここでは、江島縁起諸本の中でも、内容がよく整い、かつ成立が比較的古い、江島神社所藏の眞名本『江島縁起』に即して、縁起の梗概を簡略に示す。[2]

鎌倉郡と海月（久良岐）郡の境に深澤という湖があり、一身五頭の龍が棲んで人々を苦しめていた。欽明天皇十三年（五五二）、辯才天が現れて、海上に島を出現させる。五頭龍は辯才天に懸想するも拒まれ、殺生を止めることを誓う。すると辯才天は五頭龍を受け入れ、龍は南を向いて龍口山となった。これを子死方（龍口）明神といい、辯才天を江の島明神という。その後、役行者・泰澄・道智・空海・圓仁・安然[3]がそれぞれ江の島を訪れ、辯才天を拜する。泰澄は、龍口山にも毎日參詣して法樂を行う。すると龍口明神が現れ、國土に反逆者があれば

その首を神前に懸けるよう告げる。また道智は、食物を供えにくる天女の住處を知ろうとして、藤の絲をつけた針を天女の裳裾に刺す。絲を辿ると、天女は江の島の龍窟に住む龍であった。怒った龍は、以後江の島に藤を生やさず、僧を住まわせないと誓う。[4] 永承二年（一〇四七）に、延暦寺の皇慶が古記を披いてこの縁起を撰述したことを語り、以後の相承を記す。

江の島の成立および辯才天の悪龍教化譚の部分は、どのような素材によって形成されたのだろうか。

二　『江島縁起』の辯才天悪龍教化譚

二―一　縁起本文

まず、眞名本『江島縁起』から、冒頭にあたる、江の島の誕生と辯才天の悪龍教化譚の部分を掲げる。

①眞名本『江島縁起』

大日本國東海道相模國江島者、天龍八部之所レ造、辯才天女之靈體也。謹撿二靈島先起一者、房・藏・相三箇國之境、鎌倉與二海月郡一之間、有二四十里之湖水一。號二深澤一。其湖水爲レ體、水滔々四山逆レ影、雲霧鎮埋レ谿、豺狼滿レ岡。若人到時者、黒風拂レ梢、白浪咽レ岸、而間人蹟更

絶二湖邊一。爰有二猛悪之龍一。卽五頭一身之龍王也。屢卜二湖水一爲レ栖。自二神武天皇御宇一至二于人王十一代垂仁天皇之御宇一七百餘年之間、彼悪龍伴二風伯・鬼魅・山神等一逕二國土一爲二災害一。所謂崩レ山出二洪水一、損レ物成二病痾亂逆一。第十二代景行天皇治六十年之間、悪龍於二東國一常降二火雨一。依レ之國民以二石窟一爲二人屋一。二十一代安康天皇御宇、龍鬼託二圓大臣一令レ成二悪事一。廿六代武烈天皇之御宇、龍鬼託二金村大臣一令レ成二亂逆一。此時五頭龍初出二現湖水之南山之谷津村水門一、初噉二食人兒一。仍時人此所名二初噉澤一。西岳號二江野一。此澤者湖水之水門、南海之入江也。谷前有二女長者一。生二十六人之子一、爲二毒龍一被二噉食一乎。於レ茲長者咽二愁苦之思一、辭二舊宅一遷二住西里一。名二長者塚一。悪龍漸遍二村里一呑二喰人兒一之間、邑里之人民怖畏捨二離住所一、移二越他所一。世人此所云二子死越一。龍噉レ人既及二八箇國一。被レ呑レ親者子悲、被レ呑レ子者親悲、村南村北哭聲不レ絶。兒別レ母、夫別レ妻。爰八箇國之貴賤衆人相儀〔議〕、以レ兒周二備毒龍之贄一。凡貴賤男女啼哭之聲不二斷絶一。於レ茲人王三十代欽明天皇第十三年壬申自二四月十二日戌剋一、至二同廿三日辰剋一、當二江野之南海一、湖水之水門、雲霞暗二蔽海上一。日夜大地振動、天女雲上顯現、童子左右侍立。諸天・龍神・水火雷電・山神・鬼魅・夜叉・羅刹、從二雲上一降二盤石一、自二海底一擧二沙石一、電光耀レ天、火焰交二雜白浪一。同廿三日及二辰剋一雲レ去霞レ散。見二海上一顯二出島山一、蒼波之間一神現山新也。十二鵜降居二島上一。依レ之忽云二鵜來島一。々上天女降、形貌殊妙燿二麗質於金窟一。是卽辯才天女之應作、無熱池龍王之第三之娘也。於レ茲五頭龍見二是天女之麗質一、爲レ通二志於天女一、凌レ波渡レ島到二天女所一レ卜欲念。天女答云、我有二本誓一、愍二念有情一。汝無二慚愧一、横二害於生命一。形與レ心共我不二相似一、更不レ可レ通。龍言、我隨二教命一、自二今後一永停二凶害心一、禁二斷殺生一。願垂二哀愍一、令二我得レ遂二宿念一。于レ時天女肯。爰龍隨二順天女教誡一、發レ誓向レ南成レ山。世人是名二龍口山一、又號二子死方明神一。辯才天先以二方便之力一爲下降二伏龍之猛悪一、救中護衆生上故、所化作レ島也。垂二權迹一天女也。是號二江島明神一。

縁起ではまず、五頭の悪龍が人々を苦しめる様を語る。鎌倉郡・久良岐郡の間には深澤という湖があり、五頭一身の悪龍が棲んでいた。悪龍は風伯・鬼魅・山神等を率い、國土に災害を起こす。また火の雨を降らせたり、人に取り憑いて悪

事を行わせた。さらに悪龍は人の子を食らうようになり、被害は八箇國に及んだ。仕方なく生贄を出すに至り、人々の苦悩は大變なものであった。そしてとうとう、欽明天皇十三年[5]の四月十二日、大地が震動するとともに「辯才天女の應作」である天女が雲上に現れ、諸天・龍神その他の眷屬が島を造る。島が出來上がると、そこに天女が降り立つ。悪龍は天女の姿に愛欲を抱き求婚するが、天女は、自らは本誓を持って衆生を憐れむものであり、衆生を害する龍とは姿も心も異なるとして拒絶する。そこで龍が、悪心を止め殺生を斷つことを誓ったところ、天女は龍を受け入れ、教えに順った龍はやがて龍口山の神となる。辯才天は「方便の力」をもって悪龍を降伏したという。

江島縁起の悪龍教化譚は、女性である辯才天が、悪龍の愛欲を縁として利用することによって佛道に導き、善神へと轉換させる話といえる。

二―二　江島縁起と天川縁起

江島縁起における悪龍教化譚の構造について、田中貴子による注目すべき指摘がある。『溪嵐拾葉集』巻三十七「辯財天縁起」には、天川・嚴島・竹生島・江の島の縁起[6]と、この四箇所に箕面・脊振山を加えて六所辯才天と稱することなど、辯才天に關する諸説が集成されている。田中は、そのうち江島縁起と天川縁起について、「悪龍（障礙神）を女身の力を以て慰撫し、法の道へ導くという説話」であり、「吉祥天女感應譚と構圖を一にする」ものだという[7]。二つの縁起が構圖を同じくするならば、そこに共通する祖型の存在を想定できないだろうか。そこで以下に、『溪嵐拾葉集』における天川・江の島の縁起を以下に提示し、比較してみたい。

②『**溪嵐拾葉集**』**巻三十七**（大正藏七六―六二五上）

一、紀州天川縁起事　相傳云、紀州天川者、昔湖水大海也。此地善悪有二二龍一。此悪龍惱二害萬民一。爰三大汝・小汝二神發二慈悲一降伏悪龍ヲ之時、彼悪龍出現而吐二毒氣一。此時大汝迷亂シテ絶入ス。菩薩小汝以二八目矢一悪龍口中ニ射入ル。其時此悪龍被二降伏一破レ湖入二大海一畢。其爲レ體卷二湖水一昇二虚空一。其水濕堅而成二大岡一。今天川是也。其時善龍者卽是大辯財天女是也。夫ハ德善大王是也。又以二箕面辯財天一一體也。所レ生王子十五人也。亦是十五童子是也［已上］。又云、大汝者辯財天第一ノ王子也。小汝者第二ノ王子也。仍此二神者兄弟也［云云］。又云、大汝者日吉大宮權現也。卽釋迦垂迹也。小汝者春日大明神

是也。卽藥師如來ノ垂迹。第三王子者熊野權現是也。卽阿彌陀如來ノ垂迹也［云云］（中略）

一、江島緣起事　相州江島ト云所ニ有二長者一、十六人ノ子ヲ生リ。彼所又深澤トテ四十里ノ池アリ。其深コトト幾千萬尋ト云事ヲ不レ知。彼池ニ有二五頭龍一、其長二十丈。江野長者ノ子ヲ年喫間ニ後ニハ造レ棚ヲ懸レ贄ニ。父母コレヲ見テ悲事ハ、村南村北ニ哭聲猶勝レ百千萬行ノ涙袖ヲ朽タリ。是ヲ辯財天影向ノ御覽スルニ、哀傷無レ限。爰ニ五頭天女ヲ奉テ見繫念。其時ニ辯財不レ受［云云］其時五頭龍成レ嗔、吾信倍ス爲二衆生一生レ害。爲二天下一可レ怨タナル申。其時ニ天女我云フママニ止二毒害ヲ一、爲二萬民一成二守護一。此所ニ垂ントレ迹ヲ敕。長者ハ彼所ヲ恨テ、行迹ナレハトテ子死越ト云。サテ天女ハ天龍八部・四大天王等ヲ語テ、從レ天下レ雨、從ハレ地上シレ沙ヲ、力士ハ抛レ石、夜叉ハ運レ土ヲ、一夜ノ中、土ヲ架上テ號スレ島。號最初ニ鸕鷀來居セシ間、初ニ名ク二鸕來島一。後ニハ江野ノ南島ナレハトテ江島ト號ス。（中略）サテ五頭龍ハ成二盤石ト一、江島ヲ守テ南向テ住給リ。今ノ龍口山ノ大明神是也。彼大明神ノ誓願ニ云。暴虐ノ族ヲ我前ニ頸ヲ切テ贄ニ可レ懸。雖レ至二于未來際ニ一此願不レ空［云云］。然間鎌倉ノ謀叛殺害人夜誅强盜山賊海賊等、彼明神ノ御寶前ニテ切ルレ之。昔ノ好ト覺リ。彼大明神ノ體ハ、束帶著テ衣冠タタシキ人也［云云］。已上取意文也。江島ノ緣起ハ相州大山寺ニ在レ之。可レ尋レ之［云云］。

「紀州天川緣起事」は、要約すると以下のような話である。天川には昔大きな湖があって、善悪の二龍が棲み、悪龍は人々を惱ませていた。そこで大汝・小汝の二神が慈悲の心を發して悪龍を調伏しようとするも、龍の吐く毒氣により大汝は倒れてしまう。小汝が射た八目の矢が口に入り、悪龍は倒れる。そのときに卷き上がった湖水が丘となり、それが今の天川である。そのときの善龍は大辯財天女であり、夫は德善大王である。また箕面の辯財天と一體である。王子十五人をなし、これが十五童子である。また、大汝は辯財天の第一の王子、小汝は第二の王子である。大汝は日吉大宮權現で釋迦の垂迹、小汝は春日大明神で藥師の垂迹、第三の王子は熊野權現で阿彌陀の垂迹である。

「江島緣起事」における辯才天の悪龍教化譚は、先揭の眞名本『江島緣起』のものとおおよそ重なるため、概要は省略する。ここで、二つの緣起における辯才天の役割を比較してみよう。江島緣起において、辯才天はまさに、田中貴子の指

摘するような、女身による教化の役割を自ら果たす。對して天川縁起では、悪龍を調伏するのは大汝・小汝の兄弟である。辯才天＝善龍は、彼らの母であるという點で「女身の力」を發揮しているといえるが、江島縁起のように直接的なものではない。愛欲を女天が自らの身で受け止め、佛道へ促すという點で、江島縁起は吉祥天女感應譚と重なる。しかし天川縁起は、この構圖を持っているとは言いがたい。田中の指摘は、「女身の力」を廣義に捉えるならば妥當なものである。しかし、天川・江島の縁起における辯才天の役割を、吉祥天女感應譚と共通の構造を持つものとして同列に語ってしまうのは、やや性急と言わざるをえない。

では、女身による悪龍の教化という江島縁起のモチーフは、どのように形成されたのであろうか。吉祥天女感應譚も、原型の一つとして想定される。しかし、江島縁起において教化されるのは、災害を起こし衆生を苦しめる悪龍であって、煩悩があるとはいえ、元來吉祥天を信仰していた人間が、吉祥天の憐憫を受ける吉祥天女感應譚とは、様相が少々異なる。江島縁起の形成基盤には、吉祥天女感應譚だけではなく、別の要素もあったのではなかろうか。

三　悪龍の教化・調伏説話

佛典における悪龍調伏譚の中に、江島縁起の祖型を見出すことはできないだろうか。悪龍の教化および調伏の物語がどのように描かれてきたのか確認するため、次にいくつかの例を擧げてみたい。[8] なお紙幅の都合上、原則として悪龍教化の部分のみを引用し、前後の文脈はそれぞれの後に補う。

例えば、支謙譯『菩薩本行經』には、もと人間であった悪龍が調伏される説話が見える。

④『**菩薩本行經**』（大正藏三―一一六上）

爾時世尊明日晨朝、著レ衣持レ鉢入レ城乞レ食、詣二於龍泉一食訖洗レ鉢。洗鉢之水澍二於泉中一、龍大瞋恚卽便出レ水、吐二於毒氣一吐レ火向佛。佛身出レ水滅レ之。復雨二大雹一在於二虛空一化二成天花一、復雨二大石一化二成琦飾一、復雨二刀劍一化二成七寶一。化現二羅刹一、佛復化二現毘沙門王一、羅刹便滅。龍復化三作大象鼻捉二利劍一、佛卽化二作大師子王一、象便滅去。適作二龍像一、佛復化二作金翅鳥王一。龍便突走、盡二其神力一不レ能レ害レ佛、突二入泉中一。密迹力士擧二金剛杵一打レ山、山壞半墮二泉中一。欲二走來出一、佛化二泉水一盡成二大火一。急欲二突走一。於レ是世尊踏二龍頂上一、龍不レ得レ去。

龍乃降伏、長跪白レ佛言、世尊、今日特見二苦酷一。佛告レ龍曰、何以懷レ惡苦二惱衆生一。龍便頭面作レ禮稽二首佛足一、長跪白レ佛言、願見二放捨一。世尊所レ敕我當二奉受一。佛告レ龍曰、當下受二五戒一爲中優婆塞上。龍及妻子盡受二五戒一爲二優婆塞一。

〈雹や霜を起こしていた酸陀梨龍を呪術により制し、豐穰をもたらしていた婆羅門であったが、佛が國に來てからというもの龍や鬼神の害がなくなり、人々から輕んじられるようになる。怒った婆羅門は死して阿波羅利龍となり、酸陀梨龍を殺し、代わって自ら五穀を害する。そこに阿闍世王の請願を受けた佛が訪れ、金剛力士と共に龍を調伏し、戒を授けて優婆塞とする。(9)〉

また、佛傳の一場面として、『增一阿含經』『太子瑞應本起經』『普曜經』『佛本行集經』など多くの經典に記される火神堂の龍も、調伏・教化される龍の代表的な例といえる。ここでは支謙譯『太子瑞應本起經』から該當箇所を掲げる。

⑤『**太子瑞應本起經**』**巻下**（大正藏三―四八〇下）

佛卽澡洗前入二火室一、持二草布地一、適坐須臾、毒龍瞋恚、身中出レ煙。佛亦現レ神、身中出レ煙。龍大忿怒、身皆火出。於レ是俱盛、石室盡燃。其炎煙出、如二失火狀一。迦葉夜起、相二視星宿一、見二火室洞然一、噫噫言咄、是大沙門、端正可レ惜、不レ隨二我語一、竟爲二毒火一所レ害。佛知二其意一、於二其室內一、以二道神力一、滅二龍恚毒一、降二伏龍身一、化置二鉢中一。

〈火神を信仰していた優爲迦葉を佛が訪ね、火神の堂に泊めてほしいと請う。優爲迦葉は、堂には惡龍がいるからと斷るが、佛は構わず堂に入り、神通力をもって龍を調伏する。龍は戒を授かり、佛の鉢の中に收まる。〉

經典中の惡龍は、最終的には調伏されてしまうものの、様々な神變によって佛と應酬を繰り廣げる强大な存在として表現される。そこには龍の恐ろしさを强調することで、それを降伏する佛の威德を增す意圖が窺える。

次いで、『大唐西域記』に收錄された各地の惡龍傳承に着目したい。具體的な場所の由緒として語られるため、寺社緣起とよく似た性質を持つものといえよう。ここでは、具體的な教化・調伏の様相が說かれる例を掲げる。

巻一には、迦畢試國王城の西北二百餘里、大雪山頂の池に棲む龍の話がある。

⑥『**大唐西域記**』**巻一**（大正藏五一―八七四中）

王乃歸二命三寶一、請二求加護一、曰、宿殖二多福一、得レ爲二人王一、

威懾二強敵一統二贍部州一。今爲二龍畜一所レ屈、誠乃我之薄福也。願諸福力於レ今現前。卽於二兩肩一起二大煙焰一、龍退風靜霧卷雲開。王令二軍衆一人擔二一石一用塡二龍池一。龍王還作二婆羅門一、重請レ王曰、我是彼池龍王、懼レ威歸命。唯王悲愍赦二其前過一。王以二含育一覆二燾生靈一、如何於レ我毒加二惡害一。王若殺レ我、我之與レ王俱墮二惡道一。王有二斷命之罪一、我懷二怨讐之心一。業報晐然、善惡明矣。王遂與レ龍明設二要契一、後更有レ犯必不二相赦一。龍曰、我以二惡業一受レ身爲レ龍。龍性猛惡不レ能二自持一、瞋心或起當レ忘レ所レ制。王今更立二伽藍一不二敢摧毀一。每遣二一人一候二望山嶺一、黑雲若起急擊二揵槌一。我聞二其聲一惡心當レ息。其王於レ是更修二伽藍一建二窣堵波一。候二望雲氣一於レ今不レ絕。

〈師の阿羅漢に伴って龍王の供養を受けた沙彌が、師にだけ天の甘露が供されていることを知り、師と龍王に恨みを抱き悪龍となる。悪龍は龍王を殺し、災害をもたらす。迦膩色迦王は龍のために伽藍と塔を建てるも、龍により破壞される。そこで王が龍の住處を破壞しようとすると、悪龍が婆羅門の姿で現れて説得しようとする。王は取り合わず、争いとなる。三寶の加護を受けた王は遂に勝利するが、悪龍は自分を殺せば王は罪を受けることになると言い、二度と國を害さないことを條件に許される。以來、山にもし黑雲が起こる時は鐘をつき、龍の悪心を止めるようになった。〉

人間が恨みのために龍となり、他の龍を殺して成り代わる點で、④と共通する。龍が自分を調伏しないよう賴んだり、殺生の罪を引き合いに出して助命を求める點が興味深い。

卷二・那揭羅曷國では、佛影窟に關する傳說を記す。

⑦『**大唐西域記**』**卷二**（大正藏五一―八七八下）

昔如來在世之時、此龍爲二牧牛之士一供二王乳酪。進奉失レ宜既獲二譴責一、心懷二恚恨一。卽以二金錢一買レ華供二養受記窣堵波一、願下爲二惡龍一破レ國害上レ王。卽趣二石壁一投レ身而死、遂居二此窟一爲二大龍王一。便欲三出レ穴成二本惡願一。適起二此心一、如來已鑑二愍此國人爲レ龍所レ害、運二神通力一自二中印度一至。龍見二如來一毒心遂止、受二不殺戒一、願レ護二正法一。因請二如來一常居二此窟一、諸聖弟子恆受二我供一。如來告曰、吾將下寂滅爲レ汝留レ影、遣二五羅漢一常受中汝供。上正法隱沒其事無レ替。汝若二毒心奮怒一、當レ觀二吾留影一。以二慈善一故毒心當レ止。此賢劫中當來世尊、亦悲二愍汝一皆留二影像一。

〈王に牛乳を納めていた牛飼いが、ある時牛乳の獻上を缺いたことで責を受け、王に恨みを抱く。自ら悪龍となって復讐を果たそうとするも、佛を見るや悪心をおさめて戒を受ける。龍は、自分が再び悪心を起こしそうになったとき、心を鎮めるために姿を留めてほしいと佛に請う。これに應えて、佛は洞窟の壁にその姿を留めた。〉

佛による龍の教化説話である。龍は、佛の姿を見るや悪心を止めているため、實際には龍が害をもたらすことはない。この話もまた、恨みを抱いた人間が化した龍の例である。

また、巻三・烏仗那國に「阿波邏羅龍泉」にまつわる説話がみえる。

⑧『**大唐西域記**』**巻三**（大正藏五一―八八二中）

釋迦如來大悲御レ世、愍三此國人獨遭二斯難一、降神至レ此欲レ化二暴龍一。執金剛神杵擊二山崖一、龍王震懼乃出歸依。聞二佛説法一心淨信悟。如來遂制勿レ損二農稼一。龍曰、凡有二所食一賴レ收二人田一。今蒙二聖教一、恐難二濟給一。願十二歳一收二糧儲一。如來含覆愍而許焉。故今十二年一遭二白水之災一。

〈**殑**祇という人物が呪術で悪龍を制し、作物を守る代わりに人々から貢物を得ていた。年を經るうちに貢物が途絶えるようになり、怒った**殑**祇は自ら悪龍となる。釋迦如來は民を哀れみ、執金剛神を率いて龍を調伏する。龍は佛に歸依するが、食を得るために十二年に一度だけ水害を起こすことを許される。〉

この阿波邏羅龍説話は、先掲④『菩薩本行經』の阿波羅利龍説話と共通の傳承から派生したものであろう。

興味深いことに、これら『大唐西域記』の悪龍教化・調伏説話には、悪龍が元は人間で、何らかの理由で恨みを抱き、自ら願って死後に龍となるという共通點がある。また『大唐西域記』の悪龍傳承は、本朝の『今昔物語集』に取り入れられている。『今昔物語集』巻三には、教化される龍の説話が二話あり、ともに『大唐西域記』を原據とする。第七話「新龍伏二本龍一語」は先掲⑥に、第八話「瞿婆羅龍語」は⑦に據る。他に悪龍の話としては、巻四・第十三話「天竺二人於二海中一値二悪龍一人依二比丘教一免レ害語」がある。

⑨『**今昔物語集**』**巻四**

〈商船を龍が沈めようとするので舵取りが話を聞くと、船に乗っている僧は、龍が前世で人間であったとき、その家にいた比丘であり、日々供養をしたのに呵責をしてくれなかったために、自分は罪業を造って今では龍の身

となり、苦しむこととなった。その怨みから、比丘を殺したいという。舵取りは龍にとどまるように言い、比丘が経を讀誦すると、龍は蛇身を脱して天上に生まれ變わる。〉

この話の原據は、鳩摩羅什譯『衆經撰雜譬喩』巻下の説話と考えられている。[10] 以下はその概要である。

⑩『**衆經撰雜譬喩』巻下**（大正藏四－五三八下）

鬼曰、我知爾恚故耳。若能爲レ我布施作福呼名呪願、我便相放。船人盡許爲二作福一、鬼便放盡盡許レ之。道人卽爲レ鬼作レ會呼名呪願。餘人次復爲作レ會。詣二河中一呼レ鬼曰、卿得レ福未。鬼曰、卽得。無二復苦痛一。船人曰、明日當二爲レ卿作福一。得二自來一不。鬼曰、得耳。鬼旦化二作婆羅門像一來、手自供養、自受二呪願一。上座爲二說經一。鬼卽得二須陀洹道一、歡喜而去。

〈屠殺業者が家に僧を住まわせて供養するが、僧はその殺生を咎めない。やがて屠殺業者の父が死に、河中の鬼となる。僧が川を渡ろうとすると、鬼はその船を捕らえ、自分を咎めず罪業を重ねさせた僧を川に沈めることを要求する。船頭が拒否すると、鬼は布施と呪願を求める。そこで船頭が布施を行い、船は解放される。その後僧は鬼のために呪願をする。〉

『衆經撰雜譬喩』では「鬼」の話であったのが、『今昔物語集』では「龍」とされる。この話でもまた、恨みを抱いて死んだ人間が、河中の鬼あるいは龍となっている。

それでは、日本の寺社縁起においては、龍の調伏はどのように語られるのだろうか。箱根權現の別當行實と、源義仲の右筆を務めた覺明（信救）が建久二年（一一九一）に著したと傳える『箕根山縁起幷序』[11] では、蘆ノ湖に棲む毒龍の調伏が語られる。

⑪『**箕根山縁起幷序**』

西汀有二驛路一、毒龍凌レ浪拏レ雲、人民多不レ免二損害一。萬卷臨二彼深潭一、築二石臺一而令レ禱。爾毒龍改レ形、捧二寶珠幷錫杖・水瓶一、乞欲二受降一。卽呪而繫レ之以二鐵鎖一、號二其木幹一名二栴檀訶羅木一。厥形九頭毒龍也。所レ蟠湖水增二風浪一、山脚長洋々。臺石未レ磷、巍然波間。

〈蘆ノ湖に棲む九頭龍は風水害を起こし、人々に害をなす。萬卷上人が法力で龍を調伏すると、龍は姿を改め、寶珠と錫杖、水瓶を捧げる。そこで萬卷は龍を鎖で木に繋いだ。〉

もう一つ悪龍調伏の例として、『阿娑縛抄』「諸寺略記」か

ら、戸隠寺の縁起[12]を掲げる。

⑫『**阿娑縛抄**』**巻二百**（大正藏圖像部九－七五九上）

嘉祥二年比、學問修行者飯繩山七日之間、向二西大嵩一祈念。擲二獨鈷一飛墜、卽行見レ之、在二大石屋一。於二彼處一誦二法華經一之間、自二南方一臭風吹、而九頭一尾鬼來。何人誦二法華一哉。前祈者爲二聽聞一來也、値二我毒氣風一、觸者雖レ無二害心一、皆逝去畢。我前ノ別當住二貪欲一虛ヶ用二信施一、故受二此身一也。此處如レ此破壞顚倒四十餘ヶ度也。我依レ持二功德一、遂可レ得二菩提一。學問云、鬼者隱形。隨レ言還二本處一畢。彼所名曰二龍尾一。入二籠石屋內一畢、石屋之戸封。地中高聲ニ唱テ云、南無常住界會聖觀自在尊三所利生大權現聖者。此山字可レ曰二戸隱寺一。其故封二龍尾鬼石室之戸一而持建立故也。又反飯繩山ノ前ノ形如レ立レ戸故也。

〈學問行者が岩屋の前で法華經を讀誦していると、毒氣と共に「九頭一尾の鬼」が現れ、自分は貪欲のために姿を變えてしまった前の別當であると言う。龍は學問行者の「鬼者隱形」の言葉に從って岩屋に歸り、行者はその戸を封じる。〉

これらの縁起における悪龍教化・調伏の様相も、經典や『大唐西域記』等の流れを汲むものといえよう。龍を教化する主體には、その靈地で祀られる佛や神、また開祖や中興とされる人物が當てられる。當然、江島縁起もその例に漏れない。

以上、佛典・説話・縁起類におけるいくつかの悪龍教化・調伏譚の例を提示した。江島縁起における五頭龍の暴虐をこれらに照らしてみると、雲霧を起こし火を吐くその様子は經典や『大唐西域記』に描かれる悪龍の姿から逸脱していない。江島縁起は、龍の脅威を語ることにおいては、多くの悪龍教化・調伏譚を踏襲している。ではその教化についてはどうだろうか。教化・調伏を行う主體は佛・菩薩・高僧・王と様々である。管見の限り、教化・調伏の手段としては、法力による調伏、讀經による拔苦により悪行を止めさせるものが確認できた。しかし、これらの悪龍教化・調伏譚からは、女身による教化・調伏に直結する要素が導き出せない。女性が教化の主體となる話がないため當然のことではあるが、女身でなくとも、方便を用いた教化というモチーフ自體が見出せないのである。では、江島縁起の悪龍教化譚は、何に據って形成されたのだろうか。

四　女身による方便教化
―江島縁起と毘那夜迦王教化譚

四―一　江島縁起と毘那夜迦王教化譚

ここで、聖天信仰に關連して説かれる、毘那夜迦王教化譚に着目したい。笹間良彦が既に、十一面觀音が毘那夜迦王を改心させる説話と、江島縁起との類似性を指摘しているが、[13] 構圖の類似を擧げるに留まっている。改めて毘那夜迦王教化譚を揭げ、江島縁起と比較してみたい。毘那夜迦王教化譚を説く代表的な資料に、『大聖歡喜雙身大自在天毘那夜迦王歸依念誦供養法』がある。善無畏譯と傳えられるが、成立年代などは未詳とされる。[14]

⑬『大聖歡喜雙身大自在天毘那夜迦王歸依念誦供養法』（大正藏二一―三〇三中）

大聖自在天、是摩醯首羅大自在天王。烏摩女爲レ婦、所レ生有二三千子一。其左千五百、毘那夜迦王爲二第一一。行二諸惡事一、領二十萬七千諸毘那夜迦類一。右千五百、扇那夜迦持善天爲二第一一。修二一切善利一、領二十七萬八千諸福伎善持衆一。此扇那夜迦王、則觀音之化身也。爲三調二和彼毘那夜迦王惡行一、同生二一類一、成二兄弟夫婦一、示二現相抱同體之形一。其本因縁具在大明呪賊經。

〈大自在天の三千の子のうち、左の千五百の上首である毘那夜迦王は眷屬を率いて惡事を行っていた。右の千五百の長で、常に善行を行う扇那夜迦王は觀音の化身である。毘那夜迦王の惡行を「調和」するために、兄弟・夫婦といった「同體」の姿をとっている。〉

このような説話は『覺禪鈔』聖天に、より詳細に説かれている。

⑭『覺禪鈔』巻百五（大正藏圖像部九―四四一下）

四部法云、爾時觀自在菩薩大悲薫レ心、以二慈善根力一化爲二毘那夜迦婦女身一、往二彼歡喜王所一。于レ時彼王見二此婦女一、欲心熾盛欲レ觸二彼毘那夜迦女一而抱二其身一。于時障女形不二肯受一レ之。彼王卽憂作レ敬。於レ是彼女言、我雖レ似二障女一、從レ昔以來能憂二佛教一得二袈裟一。汝若實欲レ觸二我身一者、可レ隨二我教一。卽如レ我至レ盡二未來世一能爲二護法一不。又從レ我護二諸行人一莫レ作二障礙一不。又依レ我已後、莫レ作二毒心一不耶。汝受二如レ是教一者爲二親友一。時毘那夜迦言、我依レ縁今値二汝等一。從レ今已後隨二汝等語一守二護佛法一。于レ時毘那夜迦女含レ笑而相抱。時彼王作二歡喜一言、善哉。我等今者依二汝敕語一至二未來一護二

持佛法一不レ作二障礙一而已。仍可レ知、女天是觀自在菩薩也。是則如二經所說一。應下以二婦女身一得度上者、卽現二婦女身一［云々］。

〈障礙神である毘那夜迦王（歡喜王）の悪事を止めるため、觀音がその妻となり悪心を止め、法の道に入らせる。毘那夜迦女の姿をとった觀音は、自らは、形は毘那夜迦女に似ていても、佛法を護持するものであるとして、毘那夜迦王を受け入れない。しかし、自分の教えに隨って佛法を護るならば思いに應えようといい、毘那夜迦王に佛法を護持することを誓わせる。〉

この話では、觀音が慈悲の心を發して「毘那夜迦婦女身」となり、毘那夜迦王のところへ向かう。その姿を見て愛欲を發した毘那夜迦王は、毘那夜迦女に觸れようとするが、拒まれる。彼女は、もし觸れたいと望むならば、自らの教えに從い、以後は佛法を護持し、行人に障礙を爲さないことを誓うよう求める。毘那夜迦王がそれを承諾すると、毘那夜迦女は王を受け入れる。

この話と①江島縁起を比較してみると、物語の構造及び教化の方法が酷似している。毘那夜迦王も五頭龍も、現れた女天の姿を見て愛欲を抱くが、衆生に害をもたらしていることを理由に拒絶され、佛法の護持を誓うことで受け入れられて夫婦となる。明らかな違いとして、①では辯才天が相手と同じ龍とはならず、天女の姿をとり、五頭龍を拒絶する際には、姿も心も異なると告げるのに對し、⑭で觀音は毘那夜迦女の姿となり、毘那夜迦王に對しては、姿は似ているといっても自分は佛法を護持する存在だと言って拒絶する。[15] この對照的な表現からはむしろ、①が⑭のような記述を參照したことが想定される。江島縁起は、觀音の毘那夜迦王教化譚から着想を得て作られたものではないだろうか。[16]

四－二　十一面觀音と龍口明神

毘那夜迦王を教化する觀音については、特に十一面觀音とする說があった。[17] その一例は、天台宗の靜然による『行林抄』卷七十七・歡喜天法である。

⑳『行林抄』卷七十七（大正藏七六－四七九下）

想二水壇上有二鷄羅山一。山上有二宮殿一、宮殿之內有二圓座一、座上有二荷葉一、荷葉上有二虎字一、是字變成二毘那夜迦王一。象頭人身也。本誓之故、十一面觀世音菩薩現二女天之身一、相著眷屬。天等圍繞。

十一面觀音が、本誓により、女天となって毘那夜迦王の眷屬

となるという。

もう一つ、眞言宗の憲深『幸心鈔』巻二・聖天事から例を揭げる。

㉑『幸心抄』巻二（大正藏七八―七二五下）

師云、此像二權・二實・權實三差別有レ之也。二權共權化。二實共實類。權實則男女和合之義也。女天權化、男天實類也。十一面觀音、男天ノ障難ヲ爲二消除一、女天形ヲ現シ玉フ。二像共著二袈裟一。權化二種像共不レ著。二實像女天著、男天不著。是權實像也。委細見二含光記一。

象頭の男女二體が抱き合う形で造像される雙身聖天像の、女天を權化、男天を實類とする說について、女天は十一面觀音が男天の障礙を除くためにとる姿だという。

⑳・㉑共に鎌倉時代に成立した書物であるが、女天の姿で毘那夜迦王を敎化する觀音を、特に十一面觀音だとする說は、天台宗・眞言宗雙方に共有されていた。これは、毘那夜迦王敎化譚と江島緣起との關連性をより確實なものとする。眞名本『江島緣起』から、泰澄が龍口明神と對面する箇所を以下に引く。

㉒眞名本『江島緣起』

元正天皇養老七年［癸亥］自二春三月一泰澄大師住二江島一、讀二誦大乘經一、念二誦陀羅尼一、專一心精進每日乘レ船詣二龍口山一施二與法樂一、祈二離レ業證一レ果。而於二龍口山之間一有二二池一。大師每日爲二法樂一。一池書二寫光明眞言一入二池底一。是名二光明眞言池一。一池書二阿彌陀佛六字名號一入二池中一。是號二阿彌陀池一。如レ是施二與法樂一經二日月一之間、明神謁二對大師一言、我受二菩薩之法施一、洗二除三熱之惱垢一、獲二得宿明智一。既知二舊德之先處一也。豈生二惡心一乎。雖レ然國土逆人出來者、斬レ頸懸二我前一。是非二昔日之凶執一、屢靜二海內之凶賊一、爲レ除二逆人於萬里一。又重說レ偈曰、

我是大光普照尊　爲レ度二邪見衆生一故
普門之中示二逆路一　令三於此所現二龍口一

泰澄承二神之靈託一、不レ錯神言令二披露一。自レ爾以降逆人出來時者、截レ頸懸二山前一、始二自レ此也。

〈泰澄が江の島に住したとき、每日船に乘り龍口山へ赴き、龍口明神のために法樂を行った。やがて龍口明神が泰澄の前に現れ、三熱を免れて宿明智を得たことを語る。そして、もし國土に反逆者があれば、その首を龍口山の前に懸けよと告げ、國土の守護を誓う。〉

傍線部の偈において、龍口明神は、自らを「大光普照尊」

と稱する。これは智顗『摩訶止觀』に見える六觀音の一つである。

㉓『**摩訶止觀**』**巻二**（大正藏四六－一五上）

六字章句陀羅尼能破二煩惱障一、淨二於三毒根一成二佛道一無レ疑。六字卽是六觀世音、能破二六道三障一。所謂大悲觀世音破二地獄道三障一。此道苦重宜レ用二大悲一。大慈觀世音破二餓鬼道三障一。此道飢渴宜レ用二大慈一。師子無畏觀世音破二畜生道三障一。獸王威猛宜レ用二無畏一也。大光普照觀世音破二阿脩羅道三障一。其道猜忌嫉疑偏宜レ用二普照一也。天人丈夫觀世音破二人道三障一。人道有二事理一、事伏二憍慢一稱二天人一。理則見二佛性一故稱二丈夫一。大梵深遠觀世音破二天道三障一。梵是天主標レ主得レ臣也。

『摩訶止觀』は六觀音として、大悲・大慈・師子無畏・大光普照・天人丈夫・大梵深遠の各觀音を擧げる。[18] 大光普照觀音は、阿修羅道の三障を破るという。日本では、この六觀音に聖觀音・千手觀音等の六種が結びつけられた。良祐『三昧流口傳集』に引用された仁海の注進文はその一例である。[19]

㉔『**三昧流口傳集**』（大正藏七七－二八上）

注進　六觀音像事

大慈觀音者正觀變也。救二地獄道一。身色青白也。左手取二青蓮花一、異二例蓮花一。右手施無畏也。大悲觀音者千手變也。救二餓鬼道一。身色黃金色也。六面。左手取二紅蓮花一。右手施無畏也。師子無畏觀音者馬變也。救二畜生道一。身色青。右手取二蓮花一。蓮花上有二梵筐一。左手施無畏也。大光普照觀音者十一面變也。救二阿修羅道一。身色肉色。右手取二紅蓮花一。花上有レ瓶、自二瓶口一出二獨古杵一。左無畏也。天人丈夫觀音者准提佛母變也。救二人道一。身色紺青。右手取二青蓮花一。左手施無畏也。大梵深音觀音者如意輪變也。救二天道一。身色白。左手紅蓮花。花上立二三古杵一。右手施無畏。

右六觀音名號及所變異名、出二摩訶止觀一。但形體・色・像・取物等、依二先師傳一所二注進一如レ件。

治安三年三月二十二日　權律師仁海

大光普照觀音は、十一面觀音の變化だという。[20] 同樣の說は、源信『要法文』巻中にも『六道司命記』の引用として掲げられている。[21]

この說は、源爲憲による幼學書『口遊』にもみえる。

㉕『**口遊**』**內典門**

大慈觀音、大悲ここ、師子無畏ここ、大光普照ここ、天人丈夫ここ、大梵深遠ここ［謂之六觀音］。今案、六觀

音如レ次。配二六道一。大慈者正觀音變、大悲者千手變、師子無畏者馬頭變、大光普照者十一面變、天人丈夫者准胝變、大梵深遠者如意輪變。

このように、眞名本『江島縁起』で泰澄に對し龍口明神が名乗る「大光普照尊」すなわち大光普照觀音は、十一面觀音の變化と認識されていた。そもそも泰澄自身が十一面觀音との關連が深い人物であり、『泰澄和尚傳記』には十四歳の泰澄が「汝以二比丘形一、可レ施二十一面利生大光普照德一」との夢告を受けたこと、三十六歳の時には、九頭龍王の姿で現れた白山權現に對して本地を現すよう求め、十一面觀音の姿を顯現させたことが記される。[22] 龍口明神＝十一面觀音とすれば、江島縁起に泰澄が登場することも必然といえる。なお、古い資料が傳わっておらず、江島縁起成立に影響を與えたものには含まれないが、龍口明神の側にも十一面觀音及び泰澄との繋がりを示す傳承がある。寶暦四年（一七五四）の跋文を持つ因靜『江島大草子』によれば、龍口明神社の別當は津村の寶善院であった。[23] 天寶十二年（一八四一）成立の『新編相模國風土記稿』は、寶善院の開山は泰澄で、觀音堂には行基作の十一面觀音を安置すると記す。同じく『新編相模國風土記稿』の龍口明神條は、神體である五頭の蛇と、前立の白髭明神を泰澄の作とする。寶善院・龍口明神社において、泰澄に關わる傳承がいつ成立したかは、資料からは確認できないが、江島縁起における泰澄・龍口明神の對話場面との關連を窺わせる。

先述したように、『江島縁起』の五頭龍と辯才天の話は、毘那夜迦王と觀音、とりわけ十一面觀音の話から着想を得たものと考えられる。龍口明神が泰澄に對し自ら大光普照尊＝十一面觀音を名乗ることは、このことを裏付けるものといえよう。

四―三　江島縁起における惡龍教化譚の形成

以上、十一面觀音による毘那夜迦王教化譚が、江島縁起における惡龍教化譚の祖型となった可能性を檢討してきた。三節で述べたように、五頭龍が天變地異を起こして人々を苦しめる姿は、經典や『大唐西域記』、他の寺社縁起で描かれる惡龍のそれを踏襲する。最終的に教化されて善神となる點も、そうした多くの惡龍教化・調伏譚と同樣である。そして、辯才天が自らへの懸想を縁として五頭龍を教化するという展開は、⑳・㉑の例に代表される、十一面觀音が女身となって毘那夜迦王を教化する方便教化のモチーフが下敷きとな

ったものであろう。そのため江島縁起には、十一面觀音と縁の深い泰澄が、十一面觀音＝泰澄と對面し、託宣を受けるという重要な役割で登場するのである。

結び

小稿では、江島縁起における辯才天悪龍教化譚がどのように形成されたか解明することを目的とし、以下の考察を行った。

まず、共に辯才天の利益を説く、『溪嵐拾葉集』の江島・天川の縁起を、田中貴子の指摘を再検討する形で比較し、江島縁起の獨自性を確認した。さらに、經典や『大唐西域記』『今昔物語集』、また日本の縁起から悪龍教化・調伏譚の例を掲げ、悪龍を教化する主體と、調伏の方法を比較した。こうした多くの悪龍教化譚における、龍の暴虐の描かれ方は、江島縁起における五頭龍の姿に引き繼がれている。しかし辯才天に據る悪龍教化は、龍からの懸想を縁とした、直接的な女身による教化・調伏という點で、他の悪龍教化譚には類例が見られないものである。

そこで、江島縁起の悪龍教化譚と共通の構造を持つ、毘那夜迦王教化譚に着目し、モチーフとなった可能性を検討した。毘那夜迦女の姿に變じた觀音が、毘那夜迦王の欲を受け入れるかわりに佛法に歸依させ、悪を「調和」する。江島縁起における辯才天と五頭龍の物語をこれと照らし合わせてみると、話の構造が極めて近い。毘那夜迦王を教化する觀音は、特に十一面觀音であるとされていた。そして江島縁起で龍口明神が泰澄に對して自ら稱する「大光普照尊」は、十一面觀音の變化と認識されていた。また、泰澄が縁起に登場すること自體が、十一面觀音との繋がりを縁起にもたらすものである。以上のことから、江島縁起が毘那夜迦王教化譚を踏まえていることは確實であろう。

江の島辯才天の信仰には、江の島と龍口明神だけではなく、より廣い範圍の寺院・神社が關わっていたことが豫想できる。江の島と龍口明神および周邊寺社の交流が、江島縁起成立にどのような影響を及ぼしたのかについては、中世以前の資料が十分でなく、いまだ明らかではない。しかし、江の島の周邊一帶に、辯才天と龍、そして泰澄に關連した傳承が共通のものとして深く根差していたことが窺える。共有された傳承が、江島縁起成立において大きな役割を果たした可能性は高い。

【使用テクスト】

資料は主に以下に據りつつ、句讀點等を適宜、私に改めた。

眞名本『江島緣起』＝『藤澤市史資料』第二十集。『筥根山緣起幷序』＝箱根神社大系。『菩薩本行經』『太子瑞應本起經』『衆經撰雜譬喩』『大聖歡喜雙身大自在天毘那夜迦王歸依念誦供養法』『毘那夜迦誐那鉢底瑜伽悉地品祕要』『摩訶止觀』『大唐西域記』『三昧流口傳集』『行林抄』『幸心抄』『溪嵐拾葉集』＝大正新脩大藏經。『阿娑縛抄』『覺禪鈔』＝大正新脩大藏經圖像部。『多度神宮寺伽藍緣起幷資財帳』＝大日本佛教全書。『口遊』＝幼學の會編『口遊注解』。『今昔物語集』＝新日本古典文學大系。『日蓮上人註畫贊』＝續々日本繪卷大成。『本願寺聖人親鸞傳繪』（康永本）＝淨土眞宗聖典全書。『江島大草子』＝寶曆九年刊宮內廳書陵部藏本。『新編相模國風土記稿』＝大日本地誌大系。

【注】

（1）石塚勝「江島緣起解題」（藤澤市文書館『歷史をひもとく藤澤の資料』三（片瀨地區）付錄、二〇一八・三）。眞名本には江島神社藏『江島緣起』・神奈川縣立金澤文庫藏『相州津村江之島辯財天』、假名本には岩本樓藏『江島五卷緣起』・江島神社藏『江島緣起』（共に繪卷）・江島神社所藏『相州得瑞島上之宮緣起』などがある。

（2）緣起のより詳細な內容については、拙稿「〈研究ノート〉辯才天の惡龍教化と龍口明神（田中）江島緣起の諸本と研究動向」（『論叢アジアの文化と思想』第二十九號、二〇二一・一）を參照されたい。

（3）江島緣起では安然が圓仁の後に登場し、「尋」慈覺大師舊儀」とあることから、近江國出身で圓仁に師事し、台密を大成して五大院と稱された安然（生沒年未詳）を指すと考えられるが、その出生地を相模國星谷と記す。『走湯山緣起』等にも、安然を相模國星谷の出身とする記述が見え、この安然を五大院安然とは別の人物とする說もある。『江島緣起繪卷』（岩本院本・江島神社本）および『溪嵐拾葉集』の江島緣起では、安然を五大院と稱する。鳥谷武史は、眞名本『江島緣起』の安然は、五大院ではなく相模國の安然であり、繪卷および『溪嵐拾葉集』の編纂にあたり、五大院安然の情報が付加されたものとする（鳥谷武史「中世における宇賀辯才天信仰の研究―叡山と「江島緣起」―」（博士論文）、金澤大學、二〇一七・三）。

（4）道智は、緣起中の人物で唯一、來歷・事蹟が他の資料に見えず、江の島および龍口の周邊で生じた傳承の登場人物と考えられる。ただし、道智の名は見えないが、同樣の傳承が、江尻の大明神の話として『海道記』四月一七日の條に記されている。

（5）『日本書紀』等において、十月に百濟から佛教が公傳したとされる年。緣起が辯才天の出現および江の島成立を同年四月とすることから、佛教傳來に先立って江の島が出現したと

する意圖が明らかであろう。

（6）『溪嵐拾葉集』の江島縁起は、大山寺にあった『江島縁起』の略抄だとするが、大山寺に『江島縁起』は現存せず、實態は未詳である。

（7）田中貴子「姉妹神の周邊―龍女・辯才天・吉祥天をめぐって」（『日本文學』三十九卷第五號、一九九〇・五→『外法と愛法の中世』、砂子屋書房、一九九三・六）。ここで擧げられる「吉祥天感應譚」とは、『日本靈異記』卷中第一三話「生二愛欲一戀二吉祥天女像一感應示二奇表一緣」を指す。吉祥天女の像を見た優婆塞が、この天女のように美しい女を與えよと願ったところ、彼の夢に吉祥天女像が現れて交わるという話である。『今昔物語集』卷十七第四十五話「吉祥天女攝像奉レ犯人語」は同話。

（8）悪龍教化・調伏の傳説に言及した研究としては、宮坂宥勝「佛傳に見えるナーガについて：インド古代史の一斷面」（『智山學報』第十二・十三號、一九六四・一一）、高陽「悪龍傳説の旅―『大唐西域記』と『辨曉説草』」（『東アジアにおける旅の表象：異文化交流の文學史』（アジア遊學一八二）、二〇一五・四）、林隆嗣「ナーガ調伏のモチーフ」（『印度學佛教學研究』六十四卷第一號、二〇一五・一二）などがある。

⑧・⑨は、先行研究では言及されていない。

（9）以下、要旨を〈　〉内に記す。

（10）今野達校注『今昔物語集』一（新日本古典文學大系三三）、岩波書店、一九九九・七。時代は下るが、『三國傳記』卷十第二十二「歸依僧無二教化一檀那落二蛇道一事」・名古屋大學附屬圖書館藏小林文庫本『百因緣集』卷上第五「天竺道行事」は類話。小峯和明『今昔物語集の形成と構造』補訂版（笠間叢書一九二）、一九九三・五、追鹽千尋「名古屋大學附屬圖書館藏小林文庫本『百因緣集』上卷翻刻」（『北海學園大學人文論集』第六十八號、二〇二〇・三）參照。

（11）『筥根山縁起幷序』に關する研究には、五來重「箱根山修驗の二種の縁起について―『筥根山縁起幷序』と『筥根權現縁起繪卷』―」（『修驗道の美術・藝能・文學』（山嶽宗教史研究叢書一四）、名著出版、一九八〇・六→『寺社縁起と傳承文化』（五來重著作集四）、法藏館、二〇〇八・四）、大久保あづみ「箱根權現縁起の研究：『筥根山縁起幷序』を中心に」（『立教大學日本文學』第百十一號、二〇一四・一）、前田雅之「箱根權現の縁起」（『古典論考：日本という視座』（新典社研究叢書二五八）、新典社、二〇一四・五）などがある。繪卷については、阿部美香『本地物語の變貌―箱根權現縁起繪卷をめぐって―』（『中世文學』第四十九號、二〇〇四・六）など。萬卷（滿願）については、小林崇仁「八世紀における神宮寺出現の一背景―滿願の人物像をめぐって―」（『智山學報』第六十五號、二〇〇二・三）など參照。

（12）戸隱の縁起については、米山一政「戸隱修驗の變遷」（『富士・御嶽と中部靈山』（山嶽宗教史研究叢書九）、一九七八・

四→『信濃史の諸問題と善光寺・戸隱』（米山一政著作集一）、信濃毎日新聞社、一九九六・一一）、鈴木正崇「山嶽信仰から修驗道へ：戸隱の場合」（『儀禮文化學會紀要：儀禮文化』第一號、二〇一三・三）など參照。

(13) 『辯才天信仰と俗信』、雄山閣出版、一九九一・六。以下に該當箇所を掲げる。「觀世音菩薩は三十三應身のごとく様々な姿で表われるから、十一面觀世音菩薩に戀慕した悪逆亂暴の聖天が、その情を受けて善神になったのと同じく、悪逆の五頭龍が辯才天の麗容に戀慕し、改心することを約束に情を許されたという江島縁起も、觀世音菩薩の廣大な功德と辯才天の功德が似ていることを思わせ、辯才天は觀世音菩薩であるという説が生まれるのも頷けるところである。」なお、聖天信仰については、關尚道『わが國における聖天信仰』、平井聖天燈明寺、一九八七・九、彌永信美『觀音變容譚』（佛教神話學Ⅱ）、法藏館、二〇〇二・七に詳しい。

(14) 『大正新脩大藏經』目錄部所收の經錄には見えない。なお、賴瑜『薄草子口決』卷第十九・諸天等部・聖天之餘・具書事（大正藏七九―二九一下）に「大聖歡喜雙身大自在天毘那夜迦王歸依念誦供養法［善無畏］」の記載がある。

(15) これは、『法華經』觀世音菩薩普門品（大正九―五六下）に説かれるように、觀音は救うべき衆生に應じた姿で示現するという信仰によるものと考えられる。

(16) 女身による教化という點でこれに近いのが、親鸞が六角堂で救世觀音から夢告により授けられたと傳えられる、「行者宿報偈」「女犯偈」等と呼ばれる偈である。いま覺如『本願寺聖人親鸞傳繪』（康永本）から引用すると「行者宿報設女犯、我成二玉女身一被レ犯、一生之間能莊嚴、臨終引導生二極樂一」というものである。名畑崇は、女人に變じた觀音による性の救濟という同様の主題が『覺禪鈔』如意輪の「本尊變二王玉女一事」にあることを指摘し、如意輪觀音へのそうした信仰が「行者宿報偈」に影響を與えたとみる（名畑崇「親鸞聖人の六角夢想の偈について」（『眞宗研究』第八號、一九六三・一〇））。田中貴子はこれを承け、玉女の性的イメージの例として、慈圓の『慈鎭和尚夢想記』における、三種神器のうちの神璽は玉女であり、劍である王との清淨な交わりにより不動明王の印が成就されるという説を擧げる（田中貴子「〈玉女〉の生成と限界―『慈鎭和尚夢想記』から『親鸞夢記』まで―」、『巫と女神』（シリーズ女性と佛教四）→田中貴子『外法と愛法の中世』、砂子屋書房、一九九三・六）。山田雅教は、親鸞が「行者宿報偈」から『往生要集』を連想し、その第一人者である法然のもとに赴いた可能性を示す（山田雅教「六角堂夢告　私考」（『眞宗研究』第四九號、二〇〇五・一））。

(17) 空海が請來した不空譯『十一面觀自在菩薩心密言念誦儀軌經』卷上（大正二〇―一四二上）では、十一面觀音と毘那夜迦の像を香水で洗浴することで、一切の障難を除き、所願

を成就するという。十一面觀音による毘那夜迦王教化譚は鎌倉時代以降の佛教書に確認できるが、十一面觀音が毘那夜迦の難を除くという信仰が早くから傳わっていたことを考えると、教化譚の觀音が十一面觀音とされたのも鎌倉期より早かった可能性がある。『十一面觀自在菩薩心密言念誦儀軌經』については壁瀬灌雄「毘那夜迦伽那鉢底考」（『龍谷大學論集』第三百六十四號、一九五三・九）參照。

（18）『摩訶止觀』の六觀音と、聖觀音・千手觀音等の「眞言六觀音」との關連については、速水侑「平安時代における觀音信仰の變質―六觀音信仰の成立と展開―」（『史學雜誌』第七十五卷七號、一九六六・七→速水侑編『觀音信仰』（民衆宗教史叢書七）、雄山閣出版、一九八二・一二）參照。

（19）この注進文は賴瑜『祕鈔問答』卷八（大正藏七九―四二四中）にも引かれる。

（20）寛信『傳受集』卷二（大正藏七八―二三五下）には、大光普照觀音を馬頭觀音の變化とする説も見える。

（21）『阿娑縛抄』卷九十六（大正藏圖像九―二二三下）にも「司命五道記云」として同様の文が見える。先掲注(17)參照。

（22）『泰澄和尚傳記』における白山權現の姿については下出積與「龍形神の意味」（『日本歴史』第百八十九號、一九六四・二→下出積與編『白山信仰』（民衆宗教史叢書一八）、雄山閣出版、一九八六・五）參照。なお、大江匡房『本朝神仙傳』泰澄の條では、阿蘇社に詣でた泰澄が池に現れた九頭龍に本地の姿を示すよう求めると、金色の千手觀音が顯現する。吉原浩人「神仙習合思想史上の大江匡房―『江都督納言願文集』『本朝神仙傳』などにみる本地の探求と顯彰―」（和漢比較文學會編『説話文學と漢文學』（和漢比較文學叢書一四）、汲古書院、一九九六・二）參照。

（23）『鎌倉市史』には、寶善院が『龍口明神緣起』一卷を所藏するとあるが、未見。

【附記】 小稿は、二〇二〇年九月一五日、早稻田大學東洋哲學會第三十七回大會において發表した「辯才天の惡龍教化と龍口明神―江島緣起説話の成立をめぐって―」を基に成稿したものである。

〈キーワード〉江島緣起、辯才天、龍口明神、龍、聖天